2Ka-5

機械捺染の導入と染色堅牢性

櫻井理恵(中央福祉医療専門学校)

〔目的〕日本における機械捺染の導入は、技術不足、高額な設備のため経営の存続さえ難しかった明治期、技術の向上や短期間ではあるが第一次世界大戦による好景気を背景とし経営の安定がみられた大正期を経て、昭和期においては大衆向けの製品として手染め業者の脅威となるまでに成長をみせる。この過程において機械による捺染の大量生産性とともに着目され続けた点に染色の堅牢性があげられる。そこで当時の染色業者がこだわり続けた染色の堅牢性に着目することによって、日本の染色業における初の大量生産品の商品価値について研究することとした。

〔方法〕「日出新聞」、「染織時報」、「染織新報」、「綿ネル新報」、「染織日出新聞」をもちい、捺染業者側の取組み、販売側の要求、消費者側の反応の変化についてとりあげる。

〔結果〕研究により以下2点が明らかになった。

1、合成染料の使用が開始されたばかりで困難であった時代は、機械をもちいることで西欧諸国と同じ工程で捺染が行えるという利点をいかし、染色の堅牢性を確保した。

2、一般的に染料に対する技術が得られた後は、粗悪品が製造、販売されないよう、製造から販売にいたるまで、組合が捺染製品を管理した。

明治期の綿ネルが本ネルを、そして大正期以降の製品は織物、手染め品を模造したように、機械捺染製品はたえず独自の意匠は敬遠された。しかし昭和期における捺染業はそれまでの染色堅牢性に見られるような品質の向上に加え、すべての生地に捺染が行われたことや機械の持つ短時間大量生産性によって、安定した品質が保証され且つ流行のデザイン取り入れた捺染製品を、敏速に一般大衆に供給できる手段となったと考えられる。